

西藏文大佛頂首楞嚴經に就て

寺 本 婉 雅

大佛頂首楞嚴經の眞僞問題に付て、宋明以來支那佛敎學者間に異論あるのみならず、本經の梵語原典の發見せられざるにより尙幾多の疑惑を殘されたり。余は支那語より轉譯せし本經を將來せしかば、別項の如く「御製首楞嚴經序文」を譯して本經の由來を明かにせんと欲す。本經は余が曾て將來せし赤字大版の西藏大藏經(大谷大學圖書館所藏)以外に於ける北京版(中形黒字)にて成れるものなり。

別項「御製序文」に據れば、その昔大藏經が印度より西藏に傳來せしときは本經は存在してありしかど、ダンダルマ王(西紀八九九九年)が佛敎を破壊せしとき、堂塔伽藍は大概燒失せし際、地下に埋藏せられしも、後ち逸散して傳はざるに至れりと。而して本經が實際印度より西藏に傳來せしや否に付ては西藏大藏經の編纂者たるプトンリンボツエ喇嘛(西紀一二八八)は、本經に就て五百年を経過せば世に出現すべしとの豫言をなせし由乾隆帝の國師章嘉胡圖克圖は彼の著書中に於て見たりとて本經の梵典が曾て西藏に傳來せし事實を證明せんとせり。而して本經は康熙帝の代に智藏(ces-Rai Shin-po)なるものが支那語より滿州語、蒙古語、西藏語と順次次第して四種語を以て譯出せしものなり。然れど

今廣く天下に弘通せしめん爲め重ねて之を精譯する旨を記せり。

乾隆帝のこの御製序文は本經の由來を明瞭ならしむを得たり。余は本經原版以外の西藏大藏經に於て未だ本經の存するや否を見ず、從て本經が梵語原本に存せざるものなるや否を確むる能はざるを遺憾とするなり。げに御製序文にあるが如く、本經が宋明時代より支那佛敎學者間に於てその眞疑問題に付て諍論ありしも未だ是に適確なる斷案を下たせるを見ざりき。近時望月信亨氏は本經の眞僞問題に就ての研究を「佛敎學雜誌」第三卷第一號に發表し、本經が楞伽經、深密經、瑜伽經、唯識論、起信論等より文句或は趣意を摘採して編纂せる支那撰述の僞經なりとせられたり。余は支那語より轉譯せる西藏文の本經にある御製序文を翻譯して研究の資料に供せんとす。然れども本經の眞僞に就ては、尙西藏大藏經全部を播讀せる後にあらずば、俄かに斷定し兼ねるを覺ゆ。

西藏文御製首楞嚴經序 和譯

「王の造りし」如來秘密成就の意義を現かに得する因、一切菩薩の行海の師佛頂勇行と名くる大乘經

の精譯。(Rgyal-pos mdsad-pahi De bs in gceys Paht gsañ-Ba bsgyub-dahi Don mNon-par-Th-

ob pahi Rgyu Byai-Chub Sems-dpah Thams-Cad-kyi Spyod-pa Rgya-mTsho Sto:-pa Sams-Rgyas-

Kyi gTisug-Tor dPañ-Bar hGro-Ba Shes-Bya-Ba Theg-pa Chen-Poñi mDoñi bSgyur-Bayü)

三藏と十二部經の一切法の奥義は聖者の國(印度)より出現し、傳播によりて次第にこの中國に弘通せられたり。

最初西方より東方に流傳せられしとき、西藏の衛^{ウイ}藏^{ツァン}地方より傳播せり。聖者の國とは印度なり。衛^{ウイ}藏^{ツァン}とは西藏なり。この故に今支那に於て譯せられたる一切法は西藏國に於ても完全してありしが、只「勇行大乘經」のみは完全せざりき。その因縁云何と云ふに、西藏は或ときランダルマ王 (Gtan-Dar Ma, 899 A.D.) の代に佛教は破壊せられ、經と坦特羅との函帙は火災に遇ひて多くは地下に埋藏せられたり。その時、代經典は散逸して不完全のものとなれり。その後諸學者は協力して完全のものを書寫せんと考へしも、尙底本なくして自然に分散せしかば、書寫訂正すること能はざりき。(西藏大藏經の最初の編纂者)プトンリンポツェ (Buston Rin-po-che, 1288 A.D.) の説に據ればこの經典は五百年を経過せば(西藏の)衛^{ウイ}藏^{ツァン}國に譯出せられ、後ち西藏(全)國に必ず傳播せらるべしとの豫言をなせり。是れに就て大清國帝師章嘉胡圖克圖^{チャンチャフトウクトウ} (Loan-Skya Hu-Thu-Ku-Thu) はその論文中に明かに見たりと云へり。之れ實際信するに足る説なり。朕は萬事の企劃をなす際に、諸相承の宗義を滿州語に譯せんとする大願あり。故に卦反法、世道法、詩作法、梵語の四種法を以て完全に譯せしめたり。

又惟ふに、祖宗(康熙)帝の代に智藏 (Ges-Rah Sainpo, Prajnāyārha) が四種語を以て譯出せしも

のを、父祖(雍正)帝は之を出版して普く散布せしめ給ひたり。今「勇行大乘經」は昔(翻譯)の方法に従て譯出せしが、そは正當のものなりや否を大國師章嘉胡圖克圖に尋ねしに、是れ昔日のものに似たり。昔より西藏に(大藏經)ありしも、「勇行大乘經」は固より無かりしが、智藏が支那語より滿州語に、滿州語より蒙古語に、蒙古語より西藏語に譯出せしものにして、之れブトン師の豫言と一致するものなり。されば云何に如實に従ひて未來の爲めに熱心に傳播せずんばあるべからずとて、(帝)はトブ親王 (Thob-Chin-Wan, 蒙古王) に向ひてこの意義を知るべしと勅令を下し給ひたり。大國師章嘉胡圖克圖は又フブナイ (huphu-Nah) 等の幾多のものと共に分別商議して譯出(漢文)せり。朕はその後誤謬なからしむべく努めて校訂し、疑惑の點は章嘉胡圖克師之を商量確定して疑網を斷せり。

この經典は乾隆帝の代己卯(二十四年)より癸未(二十八年; 1759 A.D-1762)の間に譯して完成せられたり。トブ親王は是を精譯するの勅令を發し、加被力を守る方法を奏せしかば此(精譯)を作らしめたり。朕は惟ふに此「勇行大乘經」は釋迦牟尼佛が自己の甚深なる思惟の自性、如實教規の究竟に達し給へるものを説きたるものなれば、淫りに誤辭を以て解釋せば顛倒(の罪)に墮するの恐れあれば、之を精譯するの必要あり。故に今此に如實に佛説に従ひて譯出せり。

宋、明二朝の代に於て、諸の和尚は宗風を宣傳し、意義を詮示し、論法を調へん爲め諍論し、或

は比較説明するに依て不同を來たせり。恰も餓飢には食を、渴者には飲(水)を與ふべき場合に於て、若し最上の肉と、肉汁等の食糧を與へば、烈しき貪慾の必要もなきに至るが如し、この方法に依て見るに、世尊の教法を悟らず、正見にして如實に眞諦を證せざる諸の所化の心眼を俗諦の五種の虹色に依て覆はるなくんば、是れが爲めに佛敎は廣大に弘通せられ、後來の諸比丘をして之を知らしめん爲めに、祖宗(康熙)帝と、父祖(雍正)帝とが智藏をして譯出せしめ、以て諸方へ弘通せしめ給ひし風規と粗ほ相應せしむるを得べし。

乾隆帝二十八年十月十八日。(大正十一年
五月譯之)